

見 拝 顔 素



口腔生命科学系列・助手
(歯周診断・再建学)

多部田 康 一

平成17年4月1日より歯周科の助手としてお世話になっております。新潟大学を卒業して9年目となります。私は東京で生まれ小中学校時は埼玉、高校時は山梨で過ごしました。ということはすでに新潟での生活が一番長い期間ということになりました。私は新潟がとても好きです。特に雪が降るところが好きです。私が新潟大学を受験した日は前日からの雪で30cmほどの雪が積もっていました。そんな時足が冷たいとかズボンが濡れるとかそんなことは私にとってどうでもいいこととただ雪に気分は何となく浮かれつつ試験に臨む緊張のなか万代のあたりを歩きました。15年たった今でさえ雪が降ると嬉しくて景色は綺麗になることだしもっと降ればいいのにと思うのですが、雪が嫌だという新潟出身の人に会うたび不思議に思い期間によらず幼少期を過ごした場所が影響するものかなと考えたりします。実際新潟市内では期待した程に雪は降りませんでしたが日々楽しく試験時には辛く学生時代を楽しみました。そんな試験が辛い学生であったにも拘らず何故か大学院で研究をしてみたいという思いがあり先代の原 耕二教授のもと歯周病学教室へ入局させていただきました。大学院では当時山崎和久講師（現口腔生命福祉学科教授）より御指導を頂いて歯周病の自己免疫的側面や当時不明であった歯周病原性細菌由来抗原に対する自然免疫における認識機構について研究をしました。大学卒業と共に歯科医師免許を取って新しい世界へ入ったわけですが私にとっては大学院に入って研究をおこない、それにまつわるいろいろな出来事のほうがとても貴重で現在ま

での時間を充実させるものとなりました。そのうちの一つとして大学院修了後医員として勤務した後約3年間アメリカ合衆国のスクリプス研究所にポスドクとして留学することも可能になりました。留学先は免疫学の研究室だったのですが大学院時代に受けた指導のおかげもありすんなりと馴染むことができました。アメリカでの生活も慣れて3年目にもなるととてもルーティーンな生活でありながらも仕事が進むにつれますます楽しくなりました。そんなため日本に帰りたと思うことも無く過ごしていたのですがやはりいろいろな状況を考えて折角頂いたこの機会に歯周診断再建学分野において吉江教授のもとお世話になることになりました。留学前とは教室の面々も大きく変わり何だか帰ってきたというよりも新しい場所に来たような気分になりました。3年という時間はそういう長さなのだと思うと同時にまた新潟大学歯学部も建物は同じであっても中身は大きく変わって来ていることも感じました。今後もこの変化は続いていくのだと思いますがすべて自分の母校がより良くなっていく為に行われているものであると思います。ただ大学が大学らしくあってほしいということだけは望んでいます。新潟に戻っての1年目がもうすぐ終わろうとしているところです。新しい環境の中で過ごし色々な反省をしつつまた次ぎの年に臨みたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

*

口腔生命科学系列・助手
(口腔病理学)

丸 山 智



平成17年5月1日より口腔病理学分野の助手として勤務させていただいております。出身は新潟市で、双子の長男として生まれました。その後、父の転勤で新潟市を離れたことはありますが、小中高校と新潟県外にでることもなく、大学こそは県外にと思っておりましたが、新潟に残ってしまいました。といっても新潟が嫌いなわけではなく、生まれ育ったせいかむしろ昔から『新潟人はあばら骨が一本足りない』といわれるほど、いささか控えめで、自己主張が不得手とされる県民性が肌に合っている気がします。大学に入学後、在学中は新潟人らしく目立たず、控えめに過ごし、卒業する予定であったのかもしれませんが、初めて経験する県外からの個性豊かな同級生たちに刺激され(幕末の坂本龍馬のように?)、またいろいろな研究室に出入りさせていただき勉強する機会を得たなかで、うまく言葉では表現できませんが、自分のなかで以前の自分とは変わる何かがあり、大学生活はそういった意味で私にとって貴重な時間となりました。歯科医師としての卒業後の進路にたいしては、数ある選択肢の中で、病理学という学問の深さにひかれ専攻したところもありますが、むしろそれを気づかせてくださった朔教授の授業を通じて感じられた教育、学問にたいする信念そしてなによりお人柄にひかれ、朔教授のもとで研鑽を積みたいとの思いを強くもちました。病理学を専攻するにあたり、卒業後まず静岡県浜松医科大学歯科口腔外科での臨床研修後(念願の

県外初生活)、口腔病理学教室の門をたたき、現在に至っているしだいでもあります。口腔病理学分野は基礎系に属しておりますが、教育的には病理学という基礎系分野を担当し、臨床的には病理診断という形で、臨床の場において適切な治療を行なうために大きな役割を果たす部分を担っております。仕事の面ではこのように多岐にわたるため大変ではありますが、責任とともに強いやりがいを感じております。研究においては、口腔がんの病理分子学的解析をおこなっております。

朔教授との出会いがなければ現在の私は存在していなかったといえます。このような人生の方向を左右する人との出会いは、過去にも一度ありました。それは小学校4年生の時に担任をさせていただいた本宮先生との出会いでした。先生は算数指導のなかで、考えることの楽しさを当時小学生であった私に深く身につけてくださり、現在の私の基礎を築いてくださいました。当時の算数ノートはいまでも私の宝ものであり、子供がおおきくなったから見せて、話してあげたいことの一つです。

このように良き出会いに恵まれたことに、また尊敬できる人のもとで仕事ができることに対し感謝しつつ、今後とも臨床、教育そして研究に努力していきたいとおもいます。どうぞよろしくお願いいたします。

*

思い出いろいろ



口腔生命科学系列・助手
(組織再建口腔外科学)

小 田 陽 平

こんにちは。口腔外科の小田と申します。とうとうこの原稿依頼が来てしまったなあ……。正直な感想です。自分が書くとなると大問題です。よく言われるように、もっとたくさん本を読む習慣をつけておけばよかったなあと悔やむことが最近多いです。

万博の年に神奈川県で生まれました。西暦がキリのいいおかげで年齢の計算がしやすくグッドです。実家は海の近くでしたので、夏になると1シーズン何回も肩や顔の皮がむけたのを覚えています。そんな少年時代でしたが、なぜか国立大を目指してしまい、ちょうど昭和から平成になるときが受験でした。新潟にきた動機は「スキーがしょっちゅうできそうだから」という不純なもので、言葉どおり、学生の頃は年間30日スキー場にいたこともありました。今ではとても考えられません。また、ラグビー部にも在籍していましたがデンタル大会が冬でちょうどクリスマスと重なることが多く、クリスマスの朝起きると隣には毎年むさくらしい男どもが寝転がっているのです。強いチームではありませんでしたが、心強い後輩たちが入部して来てくれたおかげで次第にポチポチ勝てるようになり、確か4年生の夏合宿で初めてお隣の日本歯科大学チームに勝って泣いたのを憶えています。トライの後のゴールキックが決まって気持ち良かったのは今でも忘れない、いい思い出です。

平成7年に卒業し、ラグビー部の顧問でもあった中島前教授の口腔外科学第一教室でお世話になることを決めました。大学院は口腔病理学の朔先生にご指導いただきましたが、非常にできの悪い大学院生だったため、2人の教授には多大なご迷惑をおかけしました。このご恩は多分一生かかっても償えないと思っています。そんな大学院時代でしたが、研究の傍ら、病理診断業務のお手伝いをさせていただくことができ、今でもとても役立っています。顕微鏡で見えるモノと肉眼で見えるモノ、このつながりがなんとなく頭に浮かぶようになったこと、白い病変、赤い病変、「顕微鏡で見たらこうなっているんだろうな」と思いながら患者様を診る修練をこれからも続けたいとおもっています。

やっとこさ大学院を修了し、しばらく臨床研修したあと、平成12年から15年まで、総合病院の歯科口腔外科への長期出張のチャンスをいただきました。ここでの思い出は書き尽くすことができませんが、なかでもひとりの「がん」患者様との思い出を書きたいと思います。

Yさんは60歳、局所再発と後発転移を数度繰り返した患者様でした。治療のため入院期間が長く、のべ1年半くらい入院していたでしょうか。もはや手術その他の治療で完治は望めず、ご本人もそれをわかっていました。われわれの前では元気で、冗談を飛ばす陽気な方でしたが、つらかったのだろうと思います。ずいぶん前に離婚したため離れて暮らす娘さんがいましたが、もうすぐ結婚するというのを聞きました。結婚式にも出たかったらうし、孫の顔も見たかったらうし。かなえてあげられなかったことが残念です。見舞いに来た娘さんが婚約者を連れてきたとき、とてもうれしそうな顔をして僕に紹介してくれたこと、病室で父、娘、婚約者の記念写真のシャッターを押してあげたこと、その写真を後日ずっと大事にポケットに入れて時々見せてくれたこと、どれも大事な思い出です。ご臨終の直前に「ありがとう」といって手を握ってくれたことは僕のココロの宝ものになりました。「がん」という病気とそれと闘う患者様について考えるとき、いつでもYさんが頭に浮かんできます。これからも変わることはないでしょう。

いろいろな意味で濃密な長期出張を終え、3年前から大学に戻り、現在に至ります。いない間に教室の呼び名も教授も変わり、ちょっと浦島太郎状態でした。齊藤先生をはじめ、まわりに目標とすべきたくさんさんの「師」がたくさんいるということは幸せなことだなあ、と日々感じています。いつの日か患者様から「このヒトに診てもらいたい」と思ってもらえるようになれば一番いいのですが、それには果てしなく遠い道のりがありますので、とりあえず、当座の目標は「このヒトに診てもらってよかったなあ」と思ってもらえるドクターになることです。修行あるのみです。(果てしないなあ)

最後に、こんな旦那に呆れながらも付き合ってくれている妻と、「おとーちゃん！今度はいつ泊まりに来るの？(だいたい毎日帰ってるんですけど……)」などと悲しいことをしゃべりつつ、段々小生意気になっていく2人の子供たちにも感謝を忘れずに、稿を終えたいと思います。

口腔外科にいる背とカオのかいやつがいたら

多分ボクですので、気軽に声を掛けてください。
今後ともよろしくお願いいたします。

＊

口腔生命科学系列・助手
(口腔生化学)

石 田 陽 子



平成16年4月1日より口腔生命科学系列(口腔生化学)の助手を拝命しております、石田と申します。新潟県上越市の病院で生まれ、加茂市で育ち、現在は新潟市に住んで10年経ちますので、県外で暮らしたことはありませんが、県下上中下越の空気を少しずつ知っているという感じでしょうか。年齢ですが、奇しくも本稿の締切が自分の誕生日にあたっておまして、2006年1月で31歳になりました。一般に31歳というと教室の中では中堅世代に入り始めるのかもかもしれませんが、当口腔生化学では他のスタッフがみな大ベテランの男性教員でして、そのためか歯学科の実習などでは、学生さんからは私だけが大学院生だと思われたりしてしまうので、威厳を持つべく厳しく指導にあたっております。

私は本学の歯学部歯学科を卒業して、大学院歯学研究科・歯科補綴学第一講座(現・医歯学総合研究科・摂食機能再建学分野)に進学いたしました。歯科治療のなかでも、リハビリテーションに相当する「補綴」というステップをぜひ専攻したいと考えたからでした。また基礎研究で学位を取得したいという二重の願いを河野正司教授が快く聞き入れてくださり、大学院4年間中の3年間は口腔生化学分野(織田公光教授)に通って実験、

論文の読み方等、を教えてくださいました。生化学は生命活動を探究する各学問のなかでも、生体を構成する物質、つまり核酸・タンパク質などがいかなる機構で生命活動に寄与するかという観点で研究を行う学問ですから、目に見えない物質を追いかける方法を学ぶところから始まります。実験方法は教科書を読むだけでも膨大で、理解し実感できるようになるまでがかなりたいへんなのですが、口腔生化学は人数が少ないので、困ったことはすぐに尋ねることができ、そのきめ細かなご指導のおかげで、現在学生教育を業務とするようになってからも非常に役立っております。まだまだ修業は足りませんが……。臨床も研究もとなるといかに大変であるかはすでに大学院の頃からよくわかっていたことですが、おかげさまで今でも、医歯学総合病院での補綴治療に関わらせていただき、両教授のご厚意には心より感謝申し上げます。

ここからは、最近あった新たな出会いについて書きたいと思います。本学に入学して以来、ずっと本学で学びそのまま就職、つまり環境が変わることがほとんどなかったわけですが、昨年は少し変わった年でした。授業や臨床実習でお世話になった先生方をはじめ、教育対象である学生を含め、学内の方々はほぼ存じ上げているつもりでした。ところが、昨年からは学内の様相がなんだか変わったのです。知らない方がたくさんいらっしゃるのです。口腔生命福祉学科の新設により、学外から新たに赴任された先生方がおいでになり、女性が9割を占めるという学生さんが進級してきたからでした。新設に際しては、たいへんな努力があったとお聞きしてはいましたが、自分は歯学科の所属であるため、どんな先生が来られたのか、どんな学生さんが集まっているのか、その現実をよく知りませんでした。しかし縁あって、口腔生命福祉学科の授業でお手伝いをするようになったことから、学生さんや専任教員の先生方とお話する機会がありました。元気がよくてたくさんの調べ物を一生懸命やってくる学生さん、福祉という分野と教育に熱く身を投じられている先生方に感動・衝撃を受けました。私は歯科医師なので医学・歯学の観点からつねにものを考えなければならぬのが当然のことでしたが、少し見方を変えて、

福祉においてプロと呼ばれる方々とぜひ今後一緒にお仕事をしてみたい、そのためには自分の学んできたことをいっそう確固たるものにしなければと思ひ直すきっかけとなりました。

さらに、別の縁で歯学部同窓会の委員として同窓会行事のお手伝いをするようにもなりました。こちらでは、開業医として地域に根ざしていらっしゃる歯科医師の方々とお話する機会を得ました。院長として多忙な日々を送られながらも、歯科医師会や同窓会においてもいろいろなことをご担当され、なにより母校である本学に対し非常に強く想ってくださる方の多いことに、また感銘を受けました。

考えてみれば、学生のころから歯科医学以外のこと、つまり医療システム全体、地域、福祉、行政……などについて、当然考えるべき問題として認識していても、かといって自分がそこに直接的に寄与するにはどうしたらよいのだろう、といったジレンマを細く長く持っていましたし、またそのように思うのは私だけではないと思います。しかし、このような出会いのおかげで、今後は少し身近に考えることができるようになるかもしれないと感じることができました。年齢の話に戻しますと、今年の前厄に入り、諸先輩方からは「心身ともに気をつけなさいよ」と言われておりますが、まだまだやるべきことは多そうです。

✧



口腔生命科学系列・助手
(顎顔面放射線学)

齋藤 美紀子

平成17年4月より顎顔面放射線学分野に採用していただきました齋藤美紀子です。平成12年に本学卒業後新潟を離れていましたので、「誰だあいつは」「どこかで見た事があるような気もするけどわからん」と感じた方もいらっしゃるのではないかと思います。新潟は5年ぶりになりますが、採用直後は毎日通ったはずの歯学部の中で迷った

り、夏でもないのになる雷や強風に驚く毎日でした。

空白?の5年間、何をしていたかといいますと、東北大学の口腔診断科という新潟大学ではあまり馴染みのない教室に在籍していました(東北大に歯科放射線科はありません。診断科は口腔領域の疾患を画像診断も含めたありとあらゆる手法で診断し、予診プラス総合診療を行うといった感じでしょうか)。研究面、臨床面ともに多岐にわたり何でもやる教室でしたので、学位こそMRIの信号強度に関する基礎実験で取らせていただきましたが、高齢者の味覚に関する疫学調査、入院患者様のベッドサイドでの歯科治療、シェーグレン症候群の診断……などなど様々なことを経験させていただきました。本格的な画像診断とは縁遠い生活を送っていた私ですが、大学院修了を前に、外来の片隅で眠っていた超音波検査装置に興味を持ったのが、新潟に戻ってくるきっかけとなりました。まずは耳下腺造影をする前の患者様に探触子を当ててみることからスタートしましたが、次第に口腔外科からも検査を依頼されるようになり、何もわからず本当に困り果てました。「困った時は母校を頼ろう」とばかりに林教授にメールやら学会でお会いした際に「見学に行かせてください、エコーができるようになりたい」と泣きついた結果、こちらの教室にお世話になることとなりました。そういうわけで、画像診断の臨床はこちらに来てからはじめたも同然で、林教授はじめ教室の諸先輩方のご指導のもと日々成長?しているところです。教室の先輩方を見て、最近私が勝手に思っているのは「診断医は探偵だ!？」ということです。私のような未熟者では「犯人の足取り(所見)」をつかむので精一杯ですが、一流となれば「犯人の心情(病変の成因等?)」までもわかる。今のところ、まだまだ「迷探偵」ですが教室の名探偵たちを見習って早く一流になろうと思っております。

最後に、このような未熟な私を迎え入れてくださった母校のために、少しでもお役に立ちたい、と生意気ながら考えておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

✧



医歯学総合病院・助手
(顎顔面外科診療室)

安島久雄

こんにちは。顎顔面口腔外科学分野の安島です。私は1997年3月に歯学部を卒業し、同年4月から顎顔面口腔外科学分野（旧2口外）に大学院生として教室に入りました。1年目は外来、病棟、麻酔という口腔外科の研修を4か月ずつローテーションし、その後は口腔解剖学分野（旧2解剖）で3年間、研究生活をさせて頂きました。実はこの大学院生時代の経験が私の人生の基本になったようです。これから私の大学院時代のお話を少しさせて頂きます。また、教室に在籍して10年目を迎え、今後の豊富などもお話しさせて頂きたいと存じます。

大学院の2年目から解剖に通い出した私は全く基礎研究というものが分かっておりませんでした。解剖での私の勤めは多忙な教授にお昼の時間を告げ、一緒に昼飯を食い、教室に戻って、豆を人数分挽き、コーヒーを入れることでした。そんなある日、前田教授から「お前、明日大学に来るか？」と聞かれ、「はい」と答えました。翌日は休日でした。人気の少ない教室で紙と鉛筆で免疫染色を教えてくださいました。また、資料を凍結して、切片を切ったり、試薬を調合したり解剖の教室では基礎となる技能を教えてくださいました。前田先生の優しさを感じました。相変わらず、お昼とコーヒーは卒業まで続けました。

おかげで私は喫茶店もできるようになりました。というのも、学生時代に私は「某焼き鳥店」でバイトをしておりました。国家試験に落ちたら本気で焼き鳥店経営を考えていたので、焼き鳥居酒屋と喫茶店の2つが私のアイテムに加わったわけです。

話はそれでしたが、私のはじめての海外旅行も解剖で経験しました。その時も「お前も行くか？」と言われ、「はい」と答えてしまったばかりに、パスポートを申請し、格安航空券を手配し、一路、

アメリカはロサンゼルスへと飛び立ちました。もちろん、一人きりで大〇航空でした。「俺は後から着くから、空港で待ってろ！」と言われ、私は空港の手荷物受け取り所で自分のスーツケースをpick upし、その場で前田先生を待つことにしました。すると、警官が腰からバッジを見せ、「オ一、映画みてえ？」と思ったら「出て行け！」といきなり怒られました。予定では1時間ほど後に到着する予定であった前田先生の便は到着が遅れ、2時間以上待ち、その間、私は居眠りをしてしまいました。私は早朝に着く便であったため、日本時間ではまだ夜中。そこへ、前田先生がグラサン姿で登場し、「待ったか一、行くぞ！」。次の瞬間、見失いました。人混みの中、グラサンを探し、はじめての海外の学会を満喫しました。

その後は様々な研究方法を諸先輩や諸先生方、技術職員の方々にも教えて頂き、卒業間際にはもっと研究したいと勘違いも致しました。

解剖の大学院生の卒業旅行でグアムツアーを企画しました。一人は奥さんと、もう一人は後輩たちとそして前田先生とそれぞれに遊びの目的があり、私は当然、前田先生ということになります。「釣り、行こうよ」、「えっ、はい」げろを吐きながら釣った魚の刺身を食べました。

さらに私はツアーコンダクターもできるようになりました。これで、大学院時代の楽しい思い出は終わりです。

その後、私は口腔外科で続けて研修を積むこととなりました。私は入局1年目から、現教授の高木先生の所属する顎関節班に加えて頂いておりました。高木先生からは先ず、酒の飲み方を教わりました。はっきり申しますと、まねできません。勝てません。あんなに飲めません。

その後も教授係をさせて頂き、また最初から臨床を教えてくださいました。診断、処置、予後、まだまだ、私には至らないところが多く、似たような症例で、いくら教授のまねをしてみても、うまくいかない。これが、全身麻酔の手術であればなおのことです。外科医の端くれならば手術への思いはそれぞれにあり、教授や上司の手術をみてあんな風にやれたらと思う毎日です。

最近、改めてもう一度、教授係をしてみようか

とも思います。現在は助手として働かせて頂いておりますが、その責任の重さを日々、痛感致しております。

在籍して10年目となり、そろそろ、教室におんぶにだっこから脱却し、教室・大学に貢献できるよう頑張りたいと思います。また、分不相応ですが、海外留学などもしてみたいと思っております。高木教授をはじめ教室の皆様、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、我が家について少し……。子供は男の子が2人おります。結婚後、子供ができてから一番感じたことは、患者様との会話に少し、余裕ができたことです。また、最近ではかみさんが拾ってきたゼニガメも同居しております。時々、水槽の洗浄を兼ねゼニガメと風呂に入ることがあります。子供もカメもかみさんも、すくすく育っていることに大変幸せを感じております。くだらないことを書き綴って参りました。ご勘弁ください。どうぞ、大学で見かけたときにはお声をかけてください。

＊

医歯学総合病院・助手
(画像診断・診療室)

小 山 純 市

安易に素顔拝見の原稿依頼を受けてしまったけれど、何を書いたら良いのか見当が付かない。この大学の助手として採用されてほぼ10年になるが、仕事は段々きつくなっている感じがする。まあ年相応に体が動かなくなっていることもその一因なのだろうが、定期的に体が動かせるスポーツでも続けていたら少しは体力に自信が持てるのかも知れない。しかし、野球、サッカーのたぐいは全く興味がなく、テレビ放送は実に多いがどこが面白いのか自分にはさっぱり分からない。ドラマ、歌番組などにもほとんど興味が無いので、テレビでもそうした番組を見ることはほとんどない。日常生活ではタバコの煙は大嫌いなので喫茶店を利用することもしないし、同世代の普通の人の半分程度の消化力なので、レストランに入って

も注文するものがない。そして、これは結構困った問題で、旅先ではいつも食事に苦労している。最近は少しずつ改善されてきているが、レストランなどの食事の場所での喫煙は本当に側迷惑である。喫煙といえば、学部の6年生の初めに学生技工室を禁煙にする、しないでトラブルになったことを思い出した。今思えば、学生技工室の禁煙など当然の権利の様な気がするが、半数近い喫煙家の学生には猛反対され、それこそ相当に煙たがられたようである。この措置も一部の嫌煙家の学生には歓迎されたが、半数以上の学生には関心を持たれる措置ではなかったようである。その頃に技工室を管理するライターの受動喫煙の健康被害に対する意識が低すぎたことがその後の徹底した管理に繋がらなかったようである。喫煙権、そんなものはないと思うのだが、そのために技工室での喫煙ゼロは実現できなかったけれど、自分の健康を守る最大限の努力をしたことには今でも満足している。あの頃、技工室での喫煙権を主徴した学生が今の病院の現状を見たら何というのであろう。とは言っても20代の一時期にタバコのお世話になっていたことがあるので、体に悪いとわかっていてもタバコを止められない人の気持ちも分からなくはないのだが……。

＊

口腔乾燥症の診療に携わって



医歯学総合病院・助手
(加齢歯科診療室)

伊 藤 加代子

「新潟って住みやすい町だよ。人は優しいし、海も山もあるし、お米はおいしいし……」最近、自然にこんな言葉が出るようになりました。私が新潟に来て4年、すっかり馴染んだ証拠でしょうか。

北九州で生まれ育った私は九州歯科大学を卒業し大学院を終了した後、一念発起、新潟に居を移

しました。「なんでまた新潟に？」よくそう聞かれたものです。

私は大学院時代、第一補綴学講座では臨床を、生理学講座では唾液についての研究をご指導いただきました。研究テーマは「浸透圧や食餌の性状がラットの唾液分泌に与える影響について」で、毎日毎日ラットを抱いては唾液分泌量を測定していました。そんなある日、生理学の大家である河村洋二郎先生のご講演を拝聴する機会がありました。先生は開口一番、「マラソンでゴールしたとき、口が渴いてつらいでしょう。唾液が出ていない方はいつもそんな状態なのですよ。」とおっしゃったのです。唾液の研究をしていたにもかかわらず、自分の口腔内に唾液があるのがあまりにも当たり前すぎたために、口腔内が乾燥する辛さを考えたことがなかった私にとってその言葉は衝撃的でした。そして、基礎的な研究だけでなく、口腔乾燥症の治療に携わりたいと思うようになったのです。最近こそ「ドライマウス」という言葉が普及しつつありますが、そのころはまだ一般的ではなく、もちろん専門外来もありませんでした。では、どこに行けば学べるのか？ 考えた末、新潟大学の摂食・嚥下障害学分野の門を叩いたというわけです。2003年には「くちのかわき外来」が開設され、外来スタッフの一員に加えていただくことができました。以来、口腔乾燥症の患者様の治療に勤しんでおります。

診療をしていて気づいたのは、口腔乾燥症の治療がいわゆる一般的な歯科治療と性質を異にしているということです。まず1つめに「傾聴」が大切になります。長いときには1時間ほど患者様のお話を伺うこともあります。患者様の大半はドクターショッピングを繰り返しており、「口の渴きぐらい我慢するように言われ診てもらえなかった」と口々におっしゃいます。確かに、口腔乾燥症が直接生死に関わることはないかもしれませんが、しかし、QOLという観点から考えるとどうでしょうか？ ちょっと大きなことを言うようですが、将来的に歯科では、予防とQOLの向上が主になるのではないかと考えています。そう考えると、口腔乾燥症は決して軽視されるべき疾患ではないと考えています。

2つめは口腔乾燥症の診断や治療のために医科と連携をとることが少なくないということです。最近、医科では疾患単位ではなく全人的な診療をしようという動きが出ています。また、複数の診療科が連携をとって診療にあたる体制を構築しています。たとえば、「女性外来」では、「傾聴」を重んじており、婦人科、内科、皮膚科、泌尿器科、整形外科など複数の診療科が協力体制をとっています。しかし、歯科はまだそのチームに入っておりません。大学の学部が分かれているためか、「医科」と「歯科」はまったく別であるかのように思われがちですが、医科も歯科も人間を診ていることに変わりはありません。壁を作って閉じこめるのではなく壁を乗り越えて連携をとることが、口腔乾燥症の治療のみならず、これからの歯科には必要であると考えています。

「傾聴」と「連携」—この2つを大切に、これからも口腔乾燥症の治療に携わっていきたいと思っておりますので、ご指導の程よろしく願いいたします。

＊



医歯学総合病院・助手
(義歯(冠・ブリッジ)診療室)

白 倉 正 基

自己紹介を仰せつかりましたので、経歴や趣味、最近感じていることなどを紹介させていただきます。現在の家族構成は、日頃世話になっているカミさんが一人、1歳の息子が一人で、さらに4月には第2子が誕生する予定です。出身は群馬県前橋市で、平成3年に本学へ入学して新潟に来てから、早いもので15年が過ぎようとしています。平成10年には加齢高齢者歯科補綴学分野の前身である第2補綴科に大学院生として教室に入り、当時の第2解剖で前田教授、大島助教授のご指導のもと、インプラントに関する研究をさせていただきました。大学院卒業後は研修医、さらに医員を経て、平成16年6月1日より病院助手として採用さ

れ現在に至っています。

助手に採用されてから2年近くが過ぎようとしており、同時に歯科医師になってから8年が過ぎようとしています。それに見合った仕事をしているか、また、見合った実力があるかという、かなり疑問に思う部分があります。学内には私よりはるかに多くの仕事を抱え、はるかに大きな責任を負いながら頑張っておられる先生方がたくさんいらっしゃいます。私も一生懸命やっている人に対し、なるべく恥ずかしくないようにしなくてはならないと強く感じる今日このごろです。

趣味は基本的に屋外での活動が好きでして、野営や釣りに好んで出かけています。夏には毎年のように新潟沖の粟島へ仲間内で出かけ、海辺でテント生活を送ります。このときには生活道具一式と、ヤスなどの狩猟道具も持参して魚や貝を捕らえては食料の足しとしています。一方、山へは沢に入り天幕を張ってその下で寝泊まりし、沢の空気を吸って気分転換をしています。いわゆる沢登りみたいなものですが、私個人はあまり技術がな

いので、本格的な山行は滅多にありませんが、その場合にはベテランの仲間とで出掛けます。また、岩魚や山女魚などの溪流魚は釣って楽しく、見て美しく、食べて美味しく、三拍子そろって欠かせない楽しみです。もちろんキープして食するのは最小限の数にとどめていますが。さらには4月下旬から5月にかけての新緑の美しさ、特にブナ林の新緑は筆舌に尽くしがたい魅力があります。残雪と若葉のコントラストは見ただけで心が安まります。海へ出かけるにしろ、沢へ出かけるにしろ、絶対になくなくてはならないものは焚き火です。焚き火を前に、気の置けない仲間達と酒を飲みながらくだらない話をしたり、真面目な話をするのは何にも替えがたい楽しさがあり、これはやめると言われても到底やめられるものではありません。

このような私ですが、今後ともよろしくお願いたします。叱咤激励はメールや飲み会などで謹んでお受け致します。

